

(2) トピックス

ア 新型コロナウイルス感染症のまとめ

新型コロナウイルス感染症は、令和2年1月16日に国内1例目の報告があり、京都市では同1月31日に本市初の報告があった。

本市における令和2年の年間報告数は3,541例（京都市人口1,000人あたり年間2.4人）、令和3年は22,062例（同15.2人）、令和4年1月から6月末までは124,009例（1年間に換算すると同170.1人）であった（HER-SYSより抽出、令和4年11月30日時点）。全国の令和2年の年間報告数は234,109例（日本人口1,000人あたり1.9人）、令和3年は1,492,874例（同11.8人）、令和4年1月から6月末までは7,323,772例（1年間に換算すると同116.3人）であった（厚生労働省発表、令和4年11月30日時点）。なお、令和2年1月から令和4年6月末までの死亡者数は本市で498例（死亡割合0.37%）、全国で31,273例（同0.35%）であった。

令和2年第50週から令和4年第26週までの人口10万人あたりの報告数の推移をみると、本市において令和3年には第1週（743例：51.0）と第19週（648例：44.4）をピークとする2回の比較的小規模な流行の後、第33週（2,465例：169.1）には第1週の3倍以上となるピークが観察された。更に、令和4年第5週（11,613例：805.3）には令和3年第33週の約4.8倍のピークを持つ、これまでで最大となる流行が発生した（図1）。その後、第14週（3,772例：259.7）や第19週（3,619例：249.4）など増減を繰り返しながら減少した。しかし、第26週には増加に転じ、夏の流行が発生した（図中は省略）。

全国の報告数の推移は本市と概ね同じような増減傾向がみられるが、全体的に全国の方がやや少なかった（図1）。令和3年1月～令和4年6月末までの本市の性別・年齢階級別罹患率は、年齢階級が小さいほど高かったが、80歳以上は70歳代よりも高く60歳代とほぼ同程度であり、30～40歳代を除いて男性の方が高かった（図2折れ線）。報告数の実数は20歳代が最多で全体の19.0%を占め（図2カラム）、全年齢での男女比は0.982で女性の方が多かった。

同期間の死亡者は471例で、20歳未満の死亡者はおらず、60歳以上の死亡者が全体の95.8%を占めた。性別・年齢階級別致命率を見ると、おおむね年齢階級が高いほど死亡者数も致命率も高く、また男性の方が死亡者数も致命率も高かった（図3）。

図1 本市と全国における令和2年第50週～令和4年第26週までの人口10万人あたりの報告数

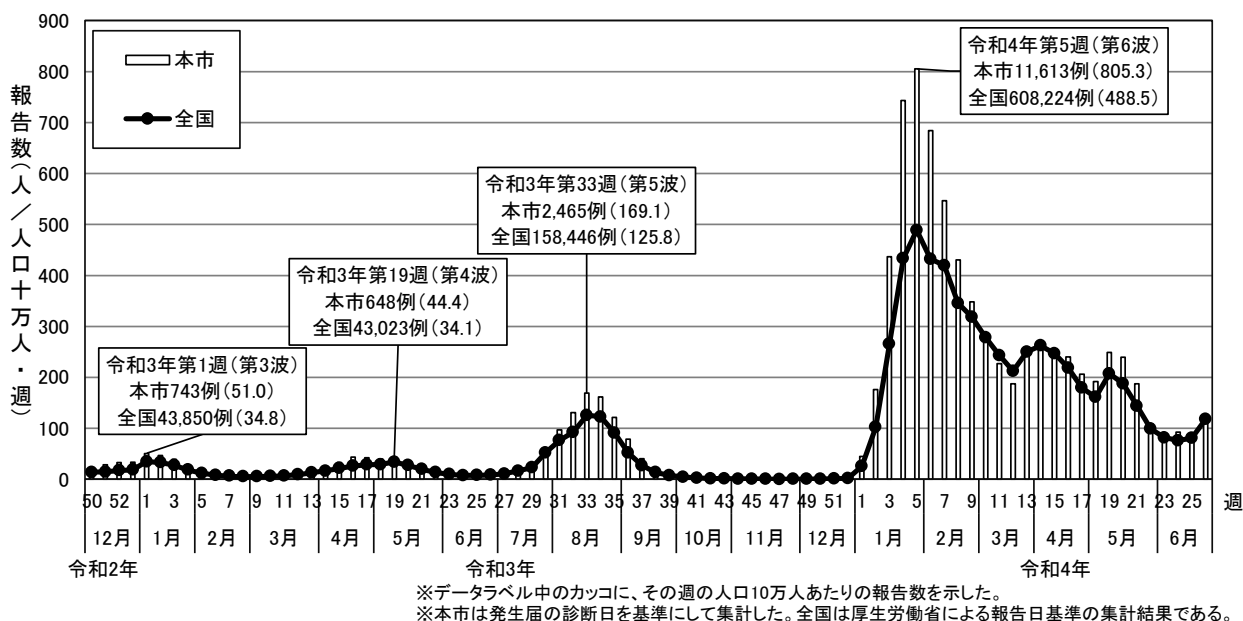


図2 本市の性別・年齢階級別の罹患率 (n=129,904)

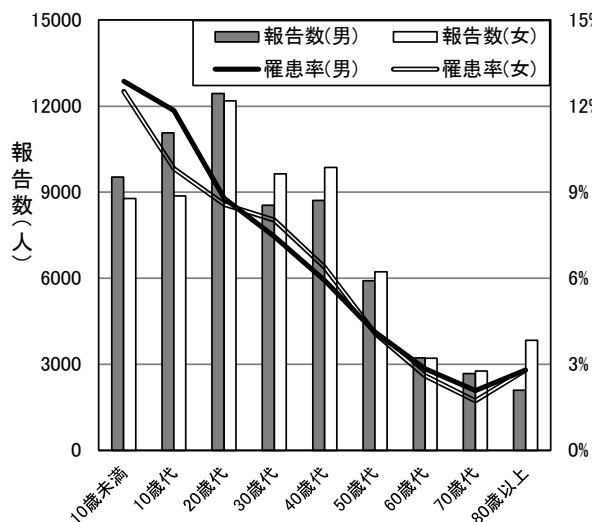
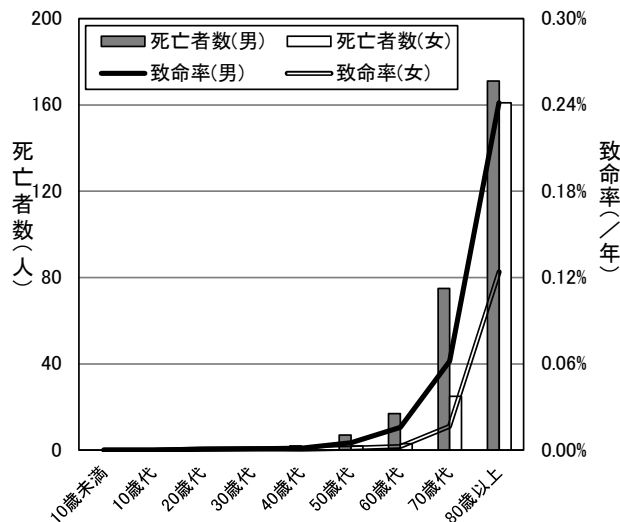


図3 本市の性別・年齢階級別の致命率 (n=471)



※図2、図3ともに観察期間は令和3年1月～令和4年6月末である。図2は性別または年齢が不明である292例を、図3も同様に3例を除く。

イ インフルエンザのまとめ

令和2年/3年シーズンは、京都市では流行入りの指標「1.0」を超えなかった。定点当たり報告数が最も多かったのは令和3年第4週（令和3年1月25日～1月31日）の0.03であった。累積報告数は12例（累積定点当たり報告数0.17）であった。

全国でも「1.0」を超えず、定点当たり報告数が最も多かったのは令和3年第5週（令和3年2月1日～2月7日）の0.02であった。累積報告数は1,335例（累積定点当たり報告数0.17）であった。

なお、全国のインフルエンザウイルス分離・検出状況は、全6例のうちA(H3)型が4例（67%）、A(H1pdm09)型が2例（33%）であり、B型は検出されなかった。

京都市の年齢階級別構成は、0～4歳（4例、33%）が最も多く、次いで20歳代（3例、25%）、50歳代（2例、17%）の順であった。

また、令和3年/4年シーズンは、京都市及び全国ともに「1.0」を超えず、最大の定点当たり報告数は京都市が0.09（令和4年第33週）、全国が0.04（令和4年28週及び29週）であった。京都市の累積報告数は21例（累積定点当たり報告数0.30）、全国の累積報告数は2,127例（累積定点当たり報告数0.44）であった。

図1 京都市及び全国の定点当たり報告数の推移

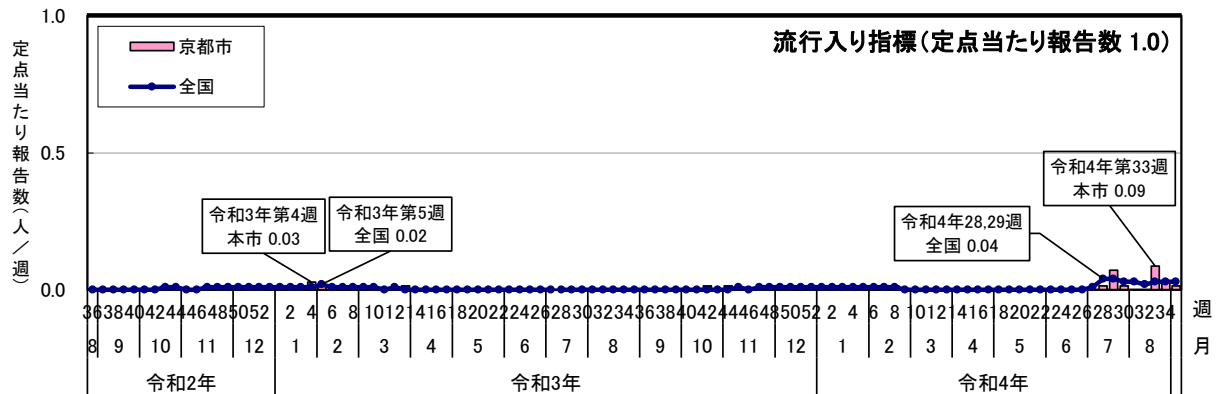


図2 全国のインフルエンザウイルス分離・検出数の推移

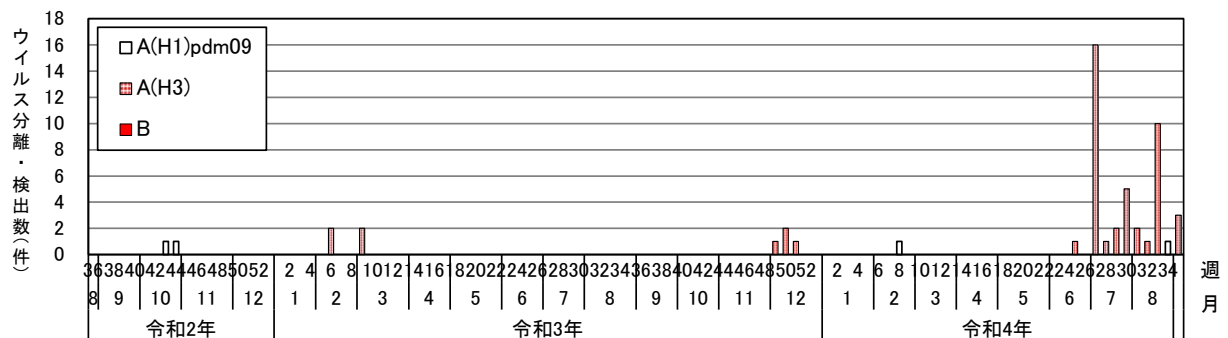


図3 京都市及び全国の年齢階級別割合

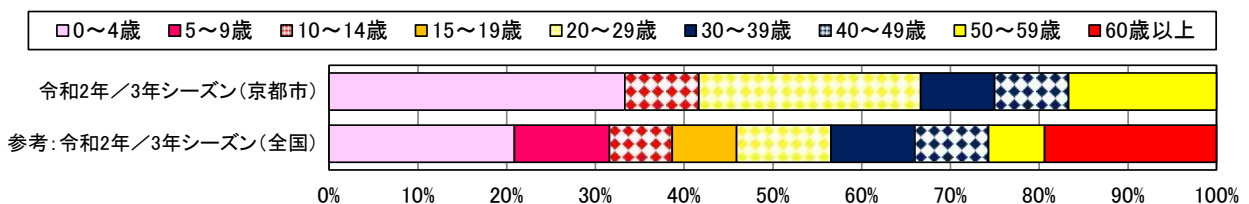


表1 京都市の過去5シーズンの流行状況

シーズン	H28/H29	H29/H30	H30/H31	R1/R2	R2/R3	R3/R4
「1.0」を上回った週	第48週	第48週	第51週	第48週		
ピーク時の 定点当たり報告数 (ピークの週)	29.59 (第4週)	47.64 (第5週)	47.71 (第4週)	18.28 (第52週)	0.03 (第4週)	0.09 (第33週)
「10」を下回った週	第10週	第11週	第7週	第6週		

ウ RSウイルス感染症のまとめ

令和2年の定点当たり報告数は、京都市において第2週(0.37)、全国において第5週(0.35)に最大となり、2月以降は過去5年平均値を上回ることなく推移した。定点当たりの年間報告数は、京都市が2.21、全国が5.74であった。

京都市における令和3年の定点当たり報告数は、第13週に過去5年平均値(平成27年～令和元年)を上回り、第16週に大きく増加した後、ゴールデンウィークを含む第18週で一旦減少し、第19週から再び増加して第22週(5月31日～6月6日)に最大(3.95)となった(図1)。その後は一時的に増加することもあったが、第33週以降は過去5年平均値を下回った。

全国における令和3年の定点当たり報告数は、第8週から過去5年平均値を超過しており、第16週を境に一旦減少したものの、第19週から再び増加して第28週(7月12日～7月18日)に最大(5.99)となった。その後は一時的に増加することもあったが、第36週以降は過去5年平均値を下回った。

過去5年平均値をみると、RSウイルス感染症は9月頃の大きなピークと11月と12月の間の比較的小さいピークがある。これは、RSウイルス感染症が晩夏から初秋にかけて、または冬のどちらかに流行する傾向があることを示している。しかし、京都市においては5月、全国においては7月にピークが見られており、例年と比べると早期に流行が始まっていた。

ここで、令和3年の定点当たりの年間報告数をみると、京都市が46.86、全国が71.96であった。平成27年～令和元年の定点当たりの年間報告数の平均値は、京都市が25.03(最大29.34、最小19.09)、全国が39.63(最大44.38、最小33.17)であり、令和3年の定点当たり年間報告数は過去5年の最大値を上回っていた。

京都市における令和3年の年齢構成比は、1歳(33.4%)、2歳(24.7%)、5ヶ月超11ヶ月まで(13.4%)の順であった。過去5年間と比較すると、1歳未満の比率が減少し、2歳以上の比率が増加していた。令和2年にRSウイルス感染症の流行が起こらなかったために、RSウイルス感染症に罹患する年齢に変化が起きていると思われる。

図1 京都市と全国における令和2～3年のRSウイルス感染症の定点当たり報告数と過去5年平均

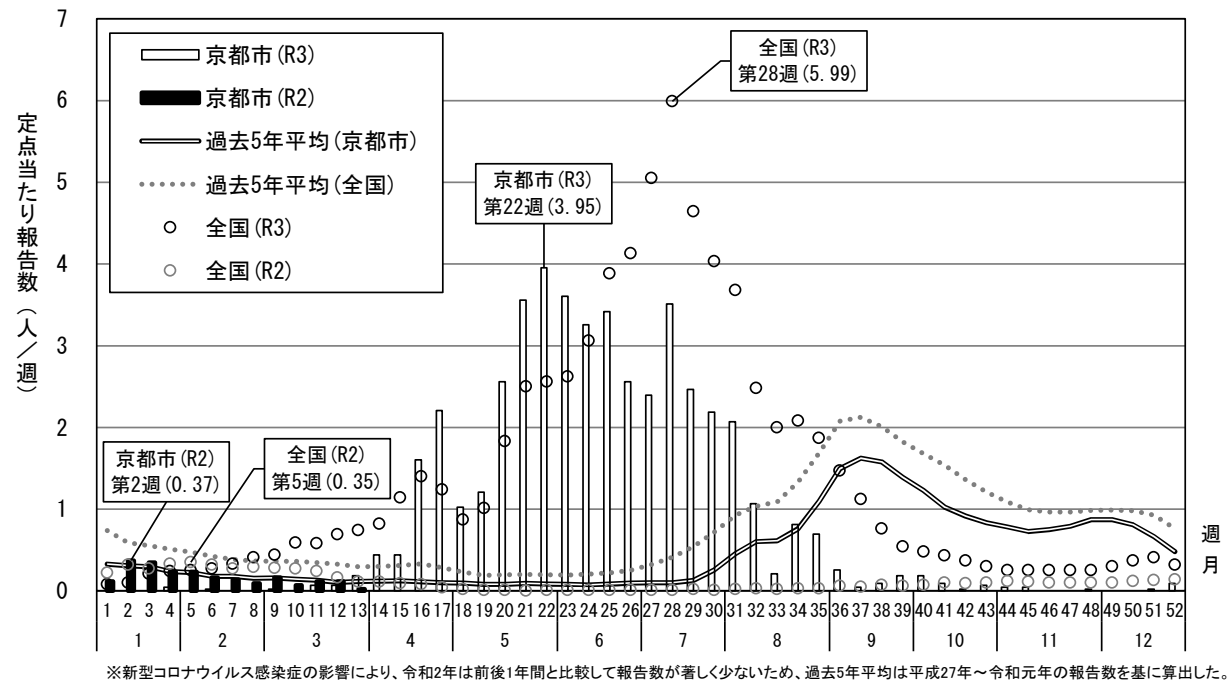
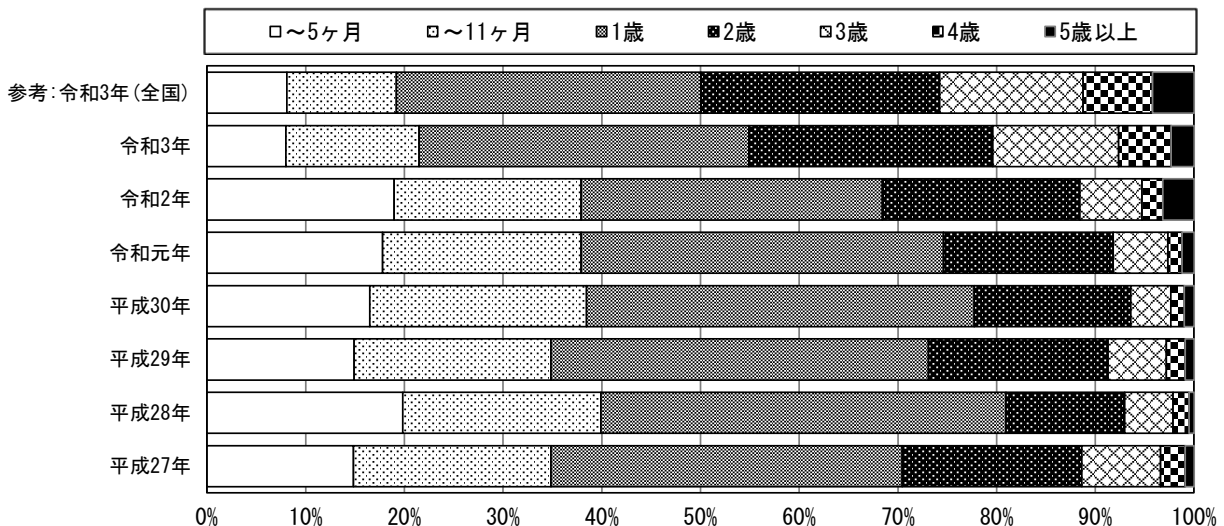


図2 京都市におけるRSウイルス感染症の年齢構成比の推移



エ 梅毒のまとめ

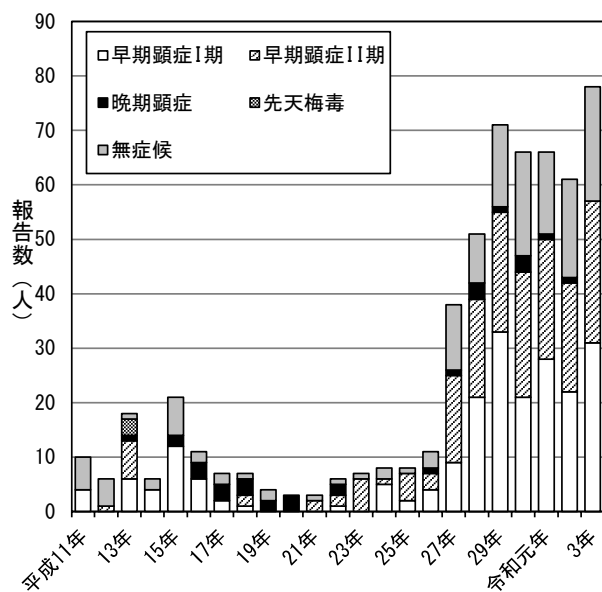
令和3年、京都市において梅毒は78人報告され、内訳は早期顕症(I期)が31人(40%)、早期顕症(II期)が26人(33%)、無症候が21人(27%)で、晩期顕症及び先天梅毒の報告はなかった。男性は49人(性比1.69)で、男女合計の年齢階級別では20歳代と30歳代が22人(同数、28%)で最も多かった。感染経路は性的接触が73人(異性間60人、同性間8人、不明5人)、不明が5人であった。6ヶ月以内の性風俗産業の従事歴があった者は12人(15%)、利用歴があった者は23人(29%)おり、重複はなかった。

京都市における梅毒の年間報告数の推移をみると(図1)、平成13年や15年など20人前後が報告される年もあったが、平成26年まではおおむね10人前後で推移していた。その後、平成27年から急激に増加し、平成29年の71人をピークに令和2年まではやや減少傾向にあったものの、令和3年には再び増加し過去22年で最多となった。

全国の推移も同様の傾向であり(図2)、平成25年頃から平成30年まで増加し続け、令和に入ってから一旦減少したものの、令和3年には再び増加して過去22年で最高となる7,978人が報告された。

性別・年齢階級別に過去5年間の報告数を比較すると、男性は女性に比べて変動が大きいものの、令和元年以降は20歳代の次に40歳代が多く、中央値も40歳代前後となっている(図3)。一方、女性は20歳代が最も多く、30歳代以下で80%前後を占めている状態が続いている(図4)。女性では、男性よりも若い世代を中心に発生していると考えられる。

図1 京都市における梅毒の年間報告数の推移



※平成11年及び14～17年は早期顕症をI期とII期に区別していないため、便宜的にI期として示した。

図2 全国における梅毒の年間報告数の推移

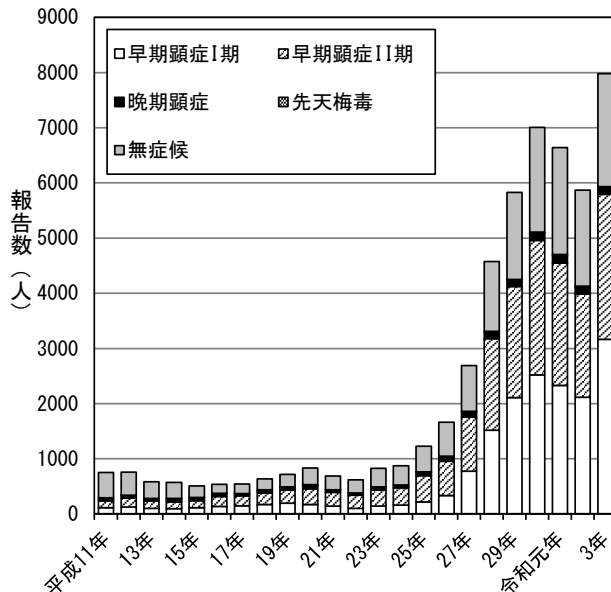


図3 京都市における梅毒の年齢構成比の推移

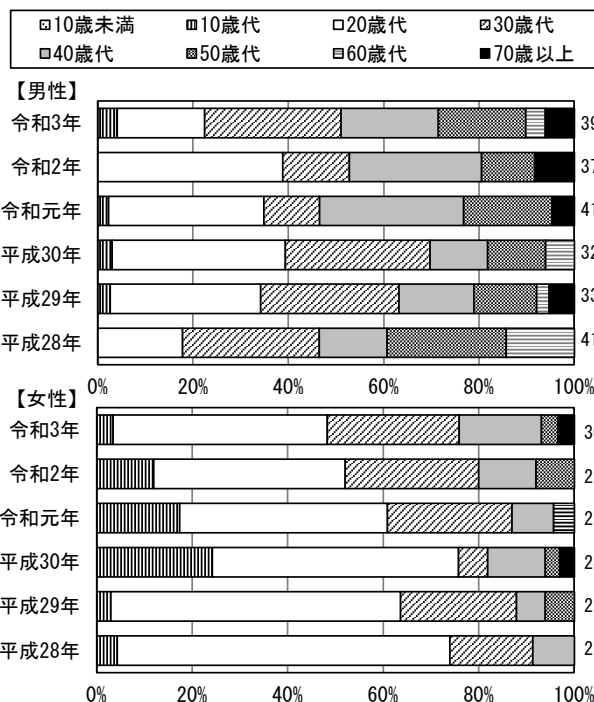
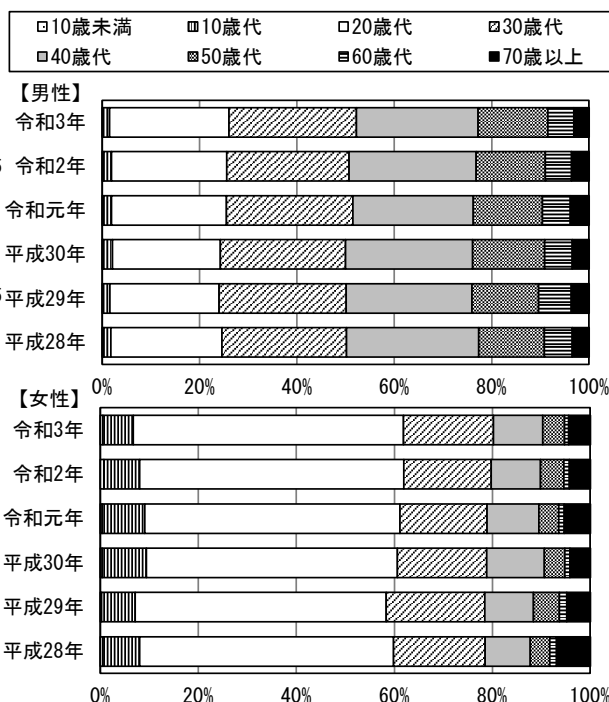


図4 全国における梅毒の年齢構成比の推移



※本市のカラム外側には、年齢中央値を示した。